

パーリ語経典韻文における 『祈り』について

橋 本 哲 夫
(大 阪 大 学)

「パーリ語経典韻文」とは、Theragāthā, Therīgāthā, Suttanipāta, Dhammapada, SN. vol. 1, Itivuttaka, Udāna 内の全ガーターを意味する。⁽¹⁾

「祈り」は、英語では prayer であり、「祈る」は pray である。prayer は、“Dictionary of Synonyms” (1984, Merriam Webster) では、見出し語 “prayer, suit, plea, petition, appeal” のなかで、“Prayer and pray imply that the request is made to a person or body invested with authority or power or especially to God or a god” (「祈り／祈る」は、力や権威を授けられた人や組織に、特に神 (God or a god) に、要請がなされることを意味する。) といわれる。それでは、それに対応するパーリ語は何であるのか? ——

アンデルセンの glossary ⁽²⁾ では、‘pray(er)’ は使われていない。

K. R. Norman の Theragāthā, Therīgāthā, Suttanipāta の英訳中では、7 回 pray という英単語が見られる (全て Sn.) が、それらは、全て、疑問文または命令文で、please の代わりに使われている。prayer はない。

ネット上の PTSD. (<http://dsal.uchicago.edu/dictionaries/pali/>) で ‘prayer’ を検索したところ、‘prayer’ は、1. āyācana (nt.) ⁽³⁾ 2. paṇḍhāna (nt.) ③ paṇḍhi (f.) ④ patthanā (f.) ⑤ brahman (nt.) の訳語として使われていた。(マル付数字の語は、「パーリ語経典韻文」に出現する。以下同じ。ただし、brahman (nt.) は prayer の意味では出現しない。)

同じくネット上の PTSD. で ‘pray’ を検索したところ、‘pray’ は、① abhijappati, ② āyācati, 3. āsāsati, ④ āsiṃsati, 5. upayācati, 6. pac-cāsati, ⑦ paṇidahati, ⑧ pattheti の訳語として使われていた。

PTS の “English-Pali Dictionary” では、prayer に対するパーリ語は、① āyācanā, 2. abhipathanā, 3. āyācaka であり、pray は、① āyācati, ② pattheti である。

以上の検索からテキスト内では、名詞 āyācanā, paṇidhi(f.), patthanā(f.), および動詞 abhijappati, āyācati, āsiṃsati, paṇidahati, pattheti が、⁽⁴⁾「祈り／祈る」の候補となったが、これらは、テキストの和訳文内⁽⁵⁾で「祈り／祈る」と訳されているのだろうか？

āyācanā：「祈願」(Thag. 473 中村元・早島鏡正訳)

paṇidhi (f.)：「誓願」(Sn. 260, Thag. 514, Thag. 222, Thag. 997 中村元, 村上真完・及川真介訳, Sn. 260 宮坂有勝訳), 「誓い」(Sn. 260 渡辺照宏訳), 「願うこと」(Sn. 801 中村訳), 「願い」(Sn. 801 村上・及川訳), 「願望」(Sn. 801 渡辺訳), 「願い求めること」(Sn. 801 宮坂訳)

patthanā (f.)：「欲求」(Thig. 91 中村訳), 「願望」(Thig. 91 早島訳)

abhijappati：「祈願する」(SN. vol. 1, p. 143 中村訳), 「崇め讃う」(SN. vol. 1, p. 143 赤沼訳), 「むさぼり求める」(Sn. 923 中村訳), 「熱望する」「望んでいる」(Sn. 1046 中村訳), 「恋着する」(Sn. 923 渡辺訳), 「欲求する」「欲する」(Sn. 1046 渡辺訳), 「求める」(Sn. 923 村上・及川訳, Sn. 1046 宮坂訳), 「希求する」(Sn. 1046 村上・及川訳), 「望む」(Sn. 923 宮坂訳)

āyācati：「請う」(Thag. 624 中村訳), 「願う」(Thag. 624 早島訳)

āsiṃsati：「望む」(SN. vol. 1, p. 34, 47, 62, Sn. 779 中村訳, SN. vol. 1, p. 34 赤沼訳, Sn. 1046 渡辺訳, Sn. 1044 宮坂訳), 「希望する」(Sn. 1044, 1046 中村訳, Sn. 1046 宮坂訳), 「欲する」(SN. vol. 1, p. 47 赤沼訳), 「求める」(SN.

vol. 1, p. 62 赤沼訳), 「希求する」(Sn. 779 渡辺訳), 「願う」(Sn. 779 村上・及川訳, Sn. 1044 渡辺訳), 「願い求める」(Sn. 779 宮坂訳)

paṇidahati : 「専念する」(SN. vol. 1, p. 133 Thig. 197 中村訳), 「願いを起こす」(SN. vol. 1, p. 200 中村訳), 「願う」(SN. vol. 1, p. 133 赤沼訳), 「志願を起す」(SN. vol. 1, p. 200 赤沼訳), 「願って心をかける」(Thig. 197 早島訳)

pattheti : 「求める」(Itig. p. 67, SN. vol. 1, p. 175, Sn. 70, 365, Thag. 57, 264, 580, 609, 777 中村訳, Sn. 70, 365, 899, 900, 976 宮坂訳, SN. vol. 1, p. 123 赤沼訳), 「望み求める」(Sn. 899 中村訳), 「追求する」(SN. vol. 1, p. 87, SN. vol. 1, p. 89 中村訳), 「～しようとする」(SN. vol. 1, p. 123 中村訳), 「望む」(Itig. p. 115, Udāna, p. 92 中村訳, Sn. 18-29 中村訳, 宮坂訳, Sn. 114 宮坂訳, Thag. 609 早島訳), 「得ようとする」(Sn. 114 中村訳), 「願い求める」(Sn. 900, 902 中村訳, Sn. 902 宮坂訳), 「得ようと願う」(Sn. 976 中村訳, Thag. 264 早島訳), 「欲する」(Thag. 51-54, 325-329 中村訳), 「願い望む」(SN. vol. 1, p. 87, SN. vol. 1, p. 89 赤沼訳), 「～しようと思う」(Thag. 51-54, 325-329 早島訳), 「意志」(Sn. 18-29 渡辺訳), 「ねがう」(Sn. 70 渡辺訳), 「～したがる」(Sn. 114 渡辺訳), 「願う」(Thig. 32, 329, 341 中村訳, Sn. 976 渡辺訳), 「こがれる」(Sn. 899 渡辺訳), 「こだわる」(Sn. 900 渡辺訳), 「欲求する」(Sn. 902 渡辺訳), 「得ようと欲する」(Thag. 57 早島訳), 「貪る」(Thag. 580 早島訳), 「希望する」(Thag. 330 中村訳), 「願いとする」(Thag. 330 早島訳)

このように英語の pray, prayer に対するパーリ語 āyācanā, paṇidhi, patthanā, abhijappati, āyācati, āsiṃsati, paṇidahati, pattheti は、邦語では、「祈り／祈る」とは限らない。故に、英語の pray, prayer の持つ観念は、邦語では、「祈り／祈る」以外の多様な言葉で表現されている

可能性がある。また、その邦語に相当するパーリ語ももっと多様なものとなっている可能性がある。つまり、「祈り／祈る」に対するパーリ語を āyācanā, paṇidhi, patthanā, abhijappati, āyācati, āsiṃsati, paṇidahati, pattheti だけに限定することはできない。

そこで、テキストの和訳文中から、⁽⁶⁾「祈り／祈る」に近い語義を持つ「願」「請」「望」「祈」を含む単語・熟語に相当するパーリ語を探すと—— adhippāya, aneja, apekkhā, appamatta, abhikaṅkhati, abhijappati, abhijhāyati, abhinandati, abhipatthita, abhiyācati, ākaṅkhati, āyācati, āyācanā, āsajjati, āsatta, āsasāna, āsā, āsiṃsati, icchati, iṭṭha, ussuka, kāma, kāmeti, chanda, jappati,⁽⁷⁾ taṇhā, nirāsaya, paṭikaṅkhati, paṭikkhati, paṇidahati, paṇidhi, patthanā, pattheti, pāmuja, pipāsa, pihayati, pekkhā, maññati, modati, yācati, rocati, lobha, vanatha, saṅkappeti, saṃroceti が検出された。

おそらく「祈り／祈る」を意味するパーリ語は、上記の内のどれかになるはずだが、それを決めるためには、「祈り／祈る」の要件をいくつか定め、各パーリ語が、その訳語（英・日）とは関係なく、それらの要件を満たしているかどうかという点で決定するしかないと考える。

「祈り」の3要件——人が、⁽⁸⁾(A)超越的他者（神など）に、(B)自力では実現不可能な自己（世界・他者）の状態（＝希望内容＝到達目標。原則として S+V であって O のみではない。典型的には、自分が来世で恵まれた生活をすること）を求めて、(C)合掌する等の（目的達成には非合理的な）何らかの表現（行動）をすること。

(A)祈る相手の「超越的他者」性という要件を満たすものという観点からすると、以下の用例が適合する。

1. jappati——「梵天」を祈る相手とする

dūre ito brāhmaṇi brahmaloko // yassāhutiṃ paggaṇhāsi niccam // n'etādiso brāhmaṇi brahmabhakkho // kiṃ jappasi brahmapatham ajānanti⁴ // パラモン婦人よ。あなたがいつも献供をささげる梵天の世界は、ここから遠いのです。パラモン婦人よ。このようなものは梵天の召し上がるたべものではないのです。あなたは梵天に達する道を知らないのに何を祈る⁽⁹⁾のですか？ (SN. vol. 1, p. 141 G.)

2. abhijappati——「梵天」を祈る相手とする

6. dvāsattati gotama puñṇakammā // vasavattino jātijaram atitā // ayam antimā vedagū brahmupatti// asmābhijappanti janā anekā ti / ゴータマよ。われら七十二人は、功德の業によって、生と老いとを超えて、世の統治者となった。この梵天として生まれることは、最後に〔生まれること〕であり、ヴェーダによって達成されるものである。多くの人々は、我らに祈る⁽¹⁰⁾。(SN. vol. 1, p. 143 G.)

(B)希望内容の「自力では実現不可能」性という要件を満たすものという観点からすると以下の用例が適合する。

1. pattheti——「天界に生まれること」を希望内容とする

① āyam ārogiyaṃ vaṇṇaṃ // saggaṃ uccākulīnataṃ // ratiyo patthayantena // uḷārā aparāparā // // 生命（長寿）と健康と美貌と、天界に生まれることと、高貴の家に生まれることと、ますます廣大なる喜びを祈る⁽¹¹⁾ならば、……（「福德を生じる行いにつとめはげむことを、賢者はほめたたえる。……現世に関する事柄、来世に関する事柄……」とつづく）(SN. vol. 1, p. 87)

② sājja ekena bhaddena muṇḍā saṃghāṭipārutā / devakāyaṃ na patthe 'haṃ vineyya hadaye dāraṃ . // そのわたしが、今では（一日

に)一食を取るだけで、頭を剃髪し、大衣を纏い、もはや神がみの身に生まれることを祈り⁽¹²⁾ません。——心の内の恐怖を除き去って。

(Thig. 32)

2. piheti——「神々の間に生れること」を希望内容とする

saccāni amma buddhavaradesitāni te bahutarā ajānantā / ye abhinandanti bhavagataṃ pihanti deveśūpapattiṃ .// お母さん。多くの人々は、尊きみ仏の説きたもうた真理を知らないで、迷いの生存を喜び、神々の間に生れることを祈っています⁽¹³⁾。(Thig. 454)

3. ākaṅkhati——「無上の三天、世界の主(梵天)と共住すること」を希望内容とする

maññe'haṃ lokādhīpati-sahavyataṃ // ākaṅkhamāno tidivam anuttaraṃ // kasmā bhavaṃ vijānam araṇṇam assito // tapo idha kubbasi brahmapattiyaṃ ti //この方は、無上の三天、世界の主(梵天)と共住することを祈って⁽¹⁴⁾おられるのだ、とわたくしは思います。
〔そうでなければ〕 どうして、あなたは、梵天に達するために、人のいない森に住みついて、ここで苦行なさるのでしょう。(SN. vol. 1, p. 181)

4. āyācanā——「子供」を希望内容とする

ekaputto ahaṃ āsiṃ piyo mātu piyo pitu bahūhi vatacariyāhi laddho āyācanāhi ca. わたしは唯だ一人の子であり、母に愛せられ、父に愛されていた。(両親が)多くの誓いを実践することにより、また祈る⁽¹⁵⁾ことによって、得られたのである。(Thag. 473)

5. jappati, 6. pattheti——「清浄」を希望内容とする

sace cuto silavatāto hoti, sa vedhati kammaṃ virādhayitvā, sa jappati patthayatidha suddhiṃ satthā va hīno pavasaṃ gharamhā.

〈渡辺照宏訳〉いったん戒律や誓いを破ったとなると，“義務を怠った”⁽¹⁶⁾ といって恐懼し、清浄になれるようにと祈り、こがれる。家を離れて旅先で隊商からはぐれた人のように。(Sn. 899)

〈注意〉これは、自力で「清浄になれる」という合理的な道が閉ざされて、「祈る」しか方法がない状態をいっているのである。

(B)さて、祈りの内容の典型として、「自分が来世で恵まれた生活をする事」をあげたが、ここで、パーリ語の bhava は Andersen の glossary によれば “m(=sa.)1) coming into existence, birth, existence, any mode of existence, being, life;” の他に、“2) increase, welfare, prosperity (opp. vibhava, q. v.); dhp. 282” があり、Childer の辞書でも、“gain, increase, welfare” がみられる。また、水野弘元『パーリ語辞典』および雲井昭善『パーリ語佛教辞典』でも「生存」等の他に、「繁栄」「幸福」(welfare の訳と思われる)が与えられている。とすれば、bhava が「祈り」の希望内容として最もふさわしいのではないか。すなわち、「bhava を到達目標として行う表現」のひとつが「祈る」であると考えられる。

そこで、「bhava を希望内容（ディティヴで表記）とし、何らかの表現を行う（もの）」という用例をテキスト内で探すと、次の三つのガーターが検出された。⁽¹⁷⁾

1. paṇidhi

yassūbhayante paṇidhīdha n’ atthi bhavābhavāya idha vā huraṃ vā, nivesanā tassa na santi keci dhammesu niccheyya samuggahitā, 彼（仏陀のいうバラモン）は今ここで、現世における幸せ、または来世における幸せな生まれを求めている、⁽¹⁸⁾ 両極端に対する paṇidhi（決意・決心）はない。〈橋本仮訳。以下略〉。(Sn. 801)

2. taṇhā

yesan tu taṇhā n’ atthi kuhiñci loke bhavābhavāya idha vā huraṃ
vā, kālena <tesu havyaṃ pavecche, yo brāhmaṇo puññapekho
yajetha.> 今ここで、現世における幸せ、または来世における幸せな
生まれを求めている、何に対する執着もない人がいる——〈橋本仮訳。
以下略〉。(Sn. 496)

3. karoti taṇhā

“yaṃ kiñci sampajānāsi dhotakā ti bhagavā uddhaṃ adho tiriyaṃ
cāpi majjhe, etaṃ veditvā ’ saṅgo ’ ti loke bhavābhavāya mā kāsi
taṇhan” ti. ドータカよ。上と下と横と中央とにおいてそなたがきづ
いてよく知っているものは何であろうと、——それは執着の対象であ
ると知って、現世における幸せ、または来世における幸せな生まれを
求めている、妄執を抱いてはならない。(Sn. 1068)

〈1.〉について、ここでは⁽¹⁹⁾paṇidhiを「決意・決心」と訳したが、
paṇidhiはPTSD.でも Childer’s Dic.でも aspiration, prayer, resolve, の
義が与えられており、さらに、paṇidhiはpaṇidahatiの派生語であり、
paṇidahatiには、PTSD.と Childer の辞書で、pray for の義が与えられ
ている。従って、paṇidhiは、「祈り」である可能性は無視できない。し
かし、paṇidhiを「祈り」と訳すと、ubhayanta(両極端)との繋がりが
巧く行かない。「両極端に祈る」は意味をなさない。

これは、実は、taṇhāで書くべきところをpaṇidhiを使ったからである。
Pj.でpaṇidhi=taṇhāとされているのは、そのことを暗示する。そこで、
よく似た〈2.〉のガーターになぞらえて、〈1.〉のpaṇidhiをtaṇhāに置
き換えると、bhavābhava, ubhayantaとの繋がりが巧く行く。つまり、
「bhavābhavaを到達目標として、ubhayantaに執着(paṇidhi=taṇhā)
する」のである。このガーターでは、実質はtaṇhāであることを承知しな

がら、わざと paṇidhi を使っているのだと考える。それは、paṇidhi という言葉は、誤って考えられると、taṇhā と同じものになってしまうのだということを知らしめるためであろう。〈1.〉のガーターの要旨は、「仏陀のいうバラモン」には、taṇhā となってしまった（誤った）paṇidhi は存在しない、という意味である。

このように、bhava のデイティヴとともに使われる paṇidhi は実は、taṇhā であったので、(B)「bhava を到達目標」として、行う(C)「非合理的表現（行動）」（行為者は、合理的と思っている）という要件を満たすパーリ語は全て taṇhā であることになる。この点で、taṇhā を「祈り」とみなすことの可能性があるが、taṇhā は(A)「超越的他者」という要件を満たさない点で十全なものではない。⁽²⁰⁾

ま と め

「祈り(る)」の可能性のあるパーリ語（下線付きは、PTSD. で、pray, prayer の訳語があるもの）

(A)祈る相手の「超越的他者」性という要件を満たすもの—— 1. jappati, 2. abhijappati

(B)希望内容の「自力では実現不可能」性という要件を満たすもの—— 1. pattheti, 2. piheti, 3. ākaṅkhati, 4. āyācanā, 5. jappati,

(B)「自力では実現不可能」性という要件の典型としての bhava を到達目標として行うなんらかの動作という観点から—— 1. taṇhā

註

- (1) 詳細は、『パーリ語韻文シソーラス』 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~pali-bud> で説明。

- (2) <http://www2s.biglobe.ne.jp/~pali-bud/setumei.htm> からダウンロード可
- (3) Critical Pali Dictionary(CPD.)では、'āyācana(n.)' 以外に 'āyācanā(f.)' もあり、Thag. 473の用例をあげている。
- (4) CPD. によれば āyācanā には prayer の義があり、abhijappati は to mutter prayers or address supplications to の義である)
- (5) Theragāthā: 中村元訳『仏弟子の告白』1989 岩波文庫, 早島鏡正訳『原始仏典 第9巻—仏弟子の詩—』昭和60年 講談社, Therīgāthā: 中村元訳『尼僧の告白』2001 岩波文庫, 早島鏡正訳『原始仏典 第9巻—仏弟子の詩—』昭和60年 講談社, Suttanipāta: 中村元訳『ブッダのことば』1991 岩波文庫, 渡辺照宏訳『世界の大思想II-2 仏典』昭和44年 河出書房新社, 村上真完・及川真介訳『仏の言葉註—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社, Dhammapada: 中村元訳『ブッダの真理のことは感興のことば』1978 岩波文庫, 藤田宏達訳『原始仏典 第7巻—ブッダの詩I—』昭和61年 講談社, SN. vol. 1: 中村元訳『ブッダ 神々との対話』『ブッダ 悪魔との対話』1986 岩波文庫, 赤沼智善訳『南伝大蔵経第12巻 相应部經典1』(新かな遣いに改めた), Udāna: 桜部建・渡辺愛子訳『原始仏典 第8巻—ブッダの詩II—』昭和60年 講談社, Itivuttaka: 長崎法潤・渡辺顯信訳『原始仏典 第8巻—ブッダの詩II—』昭和60年 講談社。
- (6) ここでの訳本とは、前記の訳本から、早島鏡正訳, 渡辺照宏訳, 村上真完・及川真介訳, 藤田宏達訳, 赤沼智善訳, 宮坂宥勝訳の各本を除いたもの。
- (7) Sn. 899の jappati は中村元氏は「となえる」と訳すが、渡辺照宏氏は「祈り」と訳し、宮坂宥勝氏は「望む」と訳す。ノーマン氏は 'long for' と訳す。japati との違いについては、宮坂宥勝『ブッダの教え スッタニパータ』(2002 法蔵館) p. 393, Sn. 899に対する注記参照。
- (8) 「平和祈念」, 「ご冥福を祈る」等と「超越的他者」を表現しないで「祈る」場合があるが、「超越的他者」は、表現されないだけで、実際には、意識されていると考える。
- (9) 「つぶやく」(中村訳, 赤沼訳)。「babblest」(R. Davids)。「mumble」(V. N. Bodhi, *The connected Discourses of the Buddha* vol. 1, p. 236)。
- (10) abhijappanti (=patthenti pihenti, Spk. vol. I, p. 209). 'offering us prayers and praises'(Mrs. Rhis Davids); 'beten' (Geiger), 'Many are the people who yearn for us' (V. B. Bodhi, *The connected Discourses of the Buddha* vol. 1, p. 238), 「語りかけて祈願する」(中村訳)
- (11) 'aspire'(Mrs. Rhis Davids), 'desire'(V. B. Bodhi, *The connected Discourses of the Buddha* vol. 1, p. 179)

- (12) ‘wish for’(Norman), 「願う」(中村訳, 早島訳)。
 (13) ‘long for’(Norman), 「望む」(早島訳), 「願う」(中村訳)。
 (14) ‘art fain to taste’(Mrs. Rhis Davids), ‘desire’(V. N. Bodhi, *The connected Discourses of the Buddha* vol. 1, p. 276), 「望む」(中村訳)。
 (15) ‘petitions’(Norman), 「祈願」(中村訳, 早島訳)。
 (16) ‘long for and desire’(Norman), 「となえて望み求める」(中村訳)。「望み求める」(宮坂訳), 「祈りこがれる」(渡辺訳)。
 (17) Sn. 856 に見られる bhavāya vibhavāya vā taṇhā の bhava/vibhava は、それらが “bhavataṇhā pahiyati, vibhavataṇhā’bhinandati” (udāna, p. 33) で「増加／減少」を意味するのと同じように、ここでも、「増加／減少」であると考えてるので、デティヴではあるが、祈りの「到達目標」にはなりえない。また, Dhp. 282に見られる bhavāya vibhavāya も同じである。Sn. 877の bhavābhavāya は「論争内容」であり, sameti の目的語と考えられるので、デティヴではあるが、祈りの「到達目標」にはなりえない。その他, bhava を目的語(デティヴ以外)とする単語には, saṅga(Sn. 1060), diṭṭhi(Sn. 786), jappati(Sn. 839), abhijappati(Sn. 923), icchatī(Sn. vol. 1, p176), āsimsati(Sn. vol. 1, p47.), chanda(Thig. 14), citta(Thag. 158), santacitta(Thag. 671), vitataṇha(Itiv. p. 44, 50.), avataṇhā(Sn. 776, 901), āgacchati(Itiv.p. 44), taṇhāgata(Sn. 776), anissita(Thag. 1141), āsatti(Sn. 777), asatta(Sn. 1059, 176, 1091), rattacitta(Sn. 235), vītivatta(Sn. 6; Udāna, p. 20)がある。また, punabhava は、「到達目標」と見られなくない用例が、一つある(punabbhavesino, Thag. 1112)だけで、他は、すべて祈りの「到達目標」にはなりえない。
 (18) bhavābhavāya の訳は、PTS などの辞書の記事および各訳本での訳を総合すると、「存在」「非存在」「生」「滅」「増加」「減少」「福祉」「幸福」「繁栄」「輪廻の生存」の組み合わせ、或いは、強調のための reduplication による訳が考えられるが、今は、確定できない。ただ, taṇhā とともに用いられるときは、人生の「最終到達目標」のようなものであることは確かだと思うので、仮にこのような訳語とした。
 (19) 正しい paṇidhi は以下のように言われる――
 ①. pañcāhāṃ pabbajito sekho appattamānaso, vihāraṃ me pavittṭhassa cetaso paṇidhī ahū: nāsissaṃ na pivissāmi vihārato na nikkhame na pi passaṃ nipāteṣsaṃ taṇhāsalle anūhate. 私は五日前に出家して、学びつつあるものであり、心の完成に到達していない。私が精舎に入ったときに心に誓願が起こった。「妄執の矢が引き抜かれないあいだは、わたしは、食べな

いであろう、飲まないであろう。精舎から出ては行くまい。脇を下にして横臥することはないであろう」と。(Thag. 222~3)

②. tato me paṇidhī āsī cetaso abhipatthito : na niside muhuttam pi taṇhāsalle anūhate. それから私は誓願を起こし、心に切望することがあった。
——妄執の矢が抜かれないあいだは、私は瞬時も坐さないであろう。(thag. 514)

正しい paṇidhi とは、「妄執の矢が抜かれる」ことを最終目標に、「精舎から出ては行かない」「脇を下にして横臥しない」「瞬時も坐さない」を実行することである。この paṇidhi が「祈り」であるためには、上述の3要件を満たす必要があるのだが、まず、(A)の「超越者に対して」が、欠けているが、しかしながら、「妄執の矢が抜かれる」を「実現不可能」な「到達目標」とみなし、「精舎から出ては行かない」などをそれを得るための「行動」とすれば、これは、要件 (B) と (C) を満たしており「祈る」とも見ることができる。しかし、「妄執の矢が抜かれる」は、本来、精進によって「実現可能」な「到達目標」のはずである。だからこそ、「私」は、精舎に入っただけである。さらに「精舎から出ては行かない」などというのは、「妄執の矢が抜かれる」ことを目的とした合理的な努力である。したがって、この paṇidhi は、「祈る」ではない。

また、Thig. 197, Sn. vol. 1, p. 133, 200で見られる「tattham cittam paṇidhehi so (三十三天など) に生まれようと心に決めなさい」の「そこ (三十三天など)」は、出家前の豊かな生活を譬えていったものであり、言われている者の意志一つで戻る事ができるので、「祈る」必要がない。すなわち、「自力では実現不可能」という要件を満たしていない。さらに、「超越者」の要件も満たしていない。ここの paṇidhati は「祈る」ではない。「(心を) 決する」である。(中村博士は、SN. vol. 1, p. 200の cittam paṇidhāti (願いを起こす) に対する注記で、paṇidahati は、「法蔵比丘が誓願を起すことなどの原語」であるとされる。)

(20) taṇhā は「信仰」なき「祈り」かも知れない。